

コロナ禍において女子大学に不本意入学した学生の 大学への適応プロセスについて

On the process of adapting to university for students who were unwillingly
enrolled in a women's university during the COVID-19crisis

菱谷 康代

跡見学園女子大学大学院
人間科学研究科臨床心理学専攻

Yasuyo Hishiya

Division of Clinical Psychology,
Graduate School of Humanities, Atomi University

要 旨

近年、わが国では、学歴社会が変容してきていると言われていたが、偏差値や大学名を重視する考えが根強く残っている。そのため、大学受験は将来を左右する分岐点となり、大学受験に失敗し、不本意入学した学生は大学生活に不適応感を持ちやすいことが分かっている。さらに現在、世界的な新型コロナウイルス感染症の影響により、行動制限がかけられ、収束の見通しが立たない不安の中にある。本稿では、そうしたコロナ禍において、不本意入学した学生がどのようなプロセスを辿って大学に適応していくのかという点に焦点を当てて研究を行った。分析方法は、個人の人生を丁寧に理解し、そこから新たな発見を得ることを目指し、複線径路等至性モデル (Trajectory Equifinality Model: TEM) を用いた。その結果、調査協力者2名の大学適応プロセスをTEM図で表し、大学適応要因が明らかになった。また、発生の三層モデル (Three Layers Model of Genesis: TLMG) によって、不本意入学に至るプロセスと、大学適応に大きな影響を与えたとされる価値観の変容プロセスの検討を行った。さらに、不本意入学による大学への拒絶感・不信感が大学生活にどのような影響を与え、その中でコロナ禍がどのように作用してくるのかという点についても具体的に検討を行った。総合考察では、不本意入学した学生の内的適応と外的適応について言及し、不本意入学というネガティブな体験が自分を見つめるきっかけとなり、内的適応感を高める機会となっていることが示唆された。

【Key Word】 コロナ禍、不本意入学、大学適応、複線径路等至性モデル

第 I 章 問題・目的

1. 不本意入学について

近年、わが国では、学歴社会が変化してきていると言われていたが、学歴を重視す

る考えが根強く残っていることも指摘されている。文部科学省 (2021a) が行った学校基本調査によると、進学率は58.9%と過去最高であり、進学に対する意識は依然高

いことが窺える。また、小規模大学が定員割れしている一方で、収容定員4000人以上の中規模大、大規模大では定員充足率が100%を超えおり（日本私立学校振興・共済事業団，2022），このことから偏差値上位校や知名度の高い人気大学においては、熾烈な受験競争が起こっていることが推察される。

学歴社会では、「良い大学に入ることのできる良い会社に就職することができ、安定した将来を過ごすことができる」という考えがあり、そうした意味において、大学受験は今後の人生を左右する重要な分岐点となる。志望する大学に落ち、不本意入学することになった者は、大学受験を後悔経験、失敗経験と捉え、大学生活に不適應感をもちやすいことが明らかになっている。（新畑・原口・江村，2022）

不本意入学の定義については、これまで様々な検討がされている。辞書的な意味では、「第一志望校の入学試験に合格できず、それ以外の学校に不本意ながら入学すること」とあり（デジタル大辞泉，2022）、不本意入学かどうかを決めるのは、不本意感の有無であると考え。そこで、本稿における不本意入学の定義は、「不本意感をもちながら進学すること」であるとする。

不本意入学する学生の割合について、ベネッセ総合教育研究（2021）が行った「第4回大学生の学習・生活実態調査」によると、第一志望で入学している学生の割合が58.1%、第二志望以下が41.9%であり、志望順位だけで見た場合、40%以上の不本意入学者がいる可能性があることが分かった。また、神林（2014）や竹内（2020）の研究からも、毎年40%以上の不本意入学者

がいる可能性が高いことが示唆され、その割合は少ないとは言えない。

不本意入学した学生は、不適應感を持ちながら大学生活を送ることで、不登校や休学、退学に繋がりがやすいことが指摘されている（山田，2006；松高，2017）。

しかし、不本意入学であっても、大学に対する捉え方によって、大学に適應している場合があることが示唆されている。新畑・他（2022）の研究では、大学受験を達成・成長経験であると捉えていれば、不本意入学であっても大学適應が良いという結果が示された。このことから、大学に対する捉え方のプロセスに焦点を当てることは、大学に不適應感を持つ学生の支援を考える上で、重要な意義を持つことであると考えられる。

2. コロナ禍が学生に与えた影響について

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、2019年12月に、中国湖北省武漢市で「原因不明の肺炎」として確認された。世界保健機関（WHO）は「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」と宣言し、パンデミック（世界的な大流行）と表明した。わが国においては、2020年1月に最初の感染者が確認され、全国各地でクラスターが相次いで発生していった。その後感染対策として、全国小中学校の一斉休校の要請や、緊急事態宣言の発令がなされ、不要不急の外出自粛やテレワークの導入が求められた。それにより、国民の行動に大きく制限がかけられることとなった。

コロナ禍が学生に与えた影響は大きく、これまでの大学生活から「コロナ禍の大学生活」に変えていくことを余儀なくされ

た。

授業は対面からオンラインへ切り替わり、大学には通わず、対面せずに、パソコンを通して授業を受けることとなった。文部科学省（2021b）の調査では、オンライン授業の悪かった点について、「友人と受けられない」「レポート等の課題が多い」「質問等双方向のやりとりの機会が少ない」「対面授業より理解しにくい」などの回答が挙げられ、オンライン授業により交友関係の希薄化や授業内容の習得のしづらさに繋がっていることが見受けられた。また、オンライン授業が多いほど、大学生活が充実している学生の割合が減少していることから（全国大学生生活協同組合連合会，2022）、オンライン授業が学生の心身の健康状態や大学適応に悪影響を与えている可能性があることが分かった。

コロナ禍における学生のメンタルヘルスの問題は深刻であり、収束の見通しが立たない中、悩みを抱え、不安やストレスを感じている学生は多いことが指摘されている。梶谷・土本・佐藤（2021）は、学生のメンタルヘルスを悪化させる要因を、①孤独感・孤立感②学業の変更・中断③オンライン授業への不満④就職活動への影響⑤課外活動（サークル・部活）の自粛⑥学内サービスへのアクセス制限⑦アルバイト等の雇い止め、の7つに分けて説明している。

一方で、コロナ禍による大学生活の変化が学生にポジティブな影響をもたらすことも指摘されている。北條・戸城・遠山・中里・古川・城越・下村・森脇・石原(2020)の研究では、コロナ禍前後で、大学生の主観的幸福感に大きな違いがないことが分か

った。さらに、鎌田（2022）は、コロナ禍におけるポジティブな側面に焦点を当て、「勉強や趣味などこれまで手が出なかったことにチャレンジできた」、「オンライン授業等を通してITスキルが向上した」、「家族や友人との関係性の変化や捉え直すことができた」、「自分を見つめる時間として活用できた」などコロナ禍で学生にポジティブな影響が起こっていることを明らかにした。

このように、コロナ禍による生活の変化が、ネガティブにもポジティブにも影響する理由については、個々の学生が置かれた環境や個人の特性が異なることが指摘されている。そのため、コロナ禍の影響について検討する際は、個人に焦点を当てる必要があると考えられるが、そうした研究は少ない。

3. 学生の大学適応に関する先行研究について

学生が大学に適応し、充実した大学生活を送るための要因については、これまで様々な検討がされている。大対（2015）の研究では、大学生活充実感を規定する要因として、「交友満足」「期待感」「不安」があり、その中でも「交友満足」が大学生活の充実にもっとも大きな影響を与えていることが分かった。しかし、この結果は、調査対象者の大半が1年生であったことの影響が強く反映されているとし、あくまでも対象者全体としての結果であり、必ずしも個々の学生にあてはまるとは限らないと述べている（大対，2015）。

大学適応のプロセスに着目した研究について、大隅・小塩・渡邊・大崎・平石（2013）

は、縦断的な調査を行い、新入生の大学適応感が入学後の4月から7月にかけて低下し、その後は変化しない傾向にあることが示された。しかし、この調査では、大学1年生が対象となっており、2年生以降の大学適応感がどのように変化していくかは明らかになっていない。さらに、奥田・川上・坂田・佐久田（2010）が行った調査では、複数年度の1～4回生の横断および縦断データから、4回生時に充実度全般が最も高まることが分かったが、その要因については明らかになっていない。

これらの先行研究を踏まえ、1年生以降の大学適応感がどのように変化していくかを調べ、その変化の要因を明らかにしていく必要があると考える。

4. TEMについて

以上の先行研究を踏まえ、大学入学から時間の流れを排除せずに不本意入学に関する意識の変遷を追うことを目的とした。そのため本研究においては、時間経過を組み込むことができる研究方法として複線径路等至性モデル (Trajectory Equifinality Model: TEM) を採用することとした。

複線径路等至性モデル (Trajectory Equifinality Model: TEM) は、等至点に至る複数の径路をモデルとして描く方法であり、複線径路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach: TEA) の中核となる概念である。TEAは、TEMのほかに、歴史的構造化ご招待 (Historically Structured Inviting: HSI)、発生の三層モデル (Three Layers Model of Genesis: TLMG) を統合する考え方である。HSIは対象者選定のための枠組みであり、研究者が興味を持って

いる経験をしている人をお招きすることである。TLMGは、文化的な記号を取り入れて変容するシステムとしての人間の動的なメカニズムを仮説的に捉える理論である。

TEMを含む質的研究法の目的は、研究者が現場や当事者、現象にできる限り寄り添うことで、研究者の思い込みとは異なる有り様に気付くことであり、中でもTEMは、時間を捨象せずに人生の理解を可能にしようとする特徴がある (荒井・安田・サトウ, 2012)。加えて、人間のLife (命・生活・人生) について、それを要素に分けたり測定したりせずに、その意味を包括的な視点から丁寧に記述することが可能であり、個別性の高いデータから、対象の理解を深め、起こりうる可能性について考察を深めていくことに意味を持つ (荒井・他, 2012)。

TEMの概念 (荒井・他, 2012; サトウ, 2015) について説明する。はじめに、等至点 (Equifinality Point: EFP) とは個々人がそれぞれ多様な径路を辿っていたとしても、等しく到達するポイントのことであり、研究者が抱いた興味関心を示すものとして機能する。分岐点 (Bifurcation Point: BFP) は径路が分岐するポイントのことである。非可逆的時間とは時間の持続を表し、時間を単位化せず、ただ質的に持続していることのみが重要であることを示す。両極化した等至点 (Polarized EFP: P-EFP) は等至点とは逆の現象のことであり、研究目的による等至点の価値づけを和らげる目的がある。分岐点に働く力のうち、等至点に近づけるように働く力を社会的ガイド (Social Guidance: SG)、等至点から遠ざけるように働く力を社会的方向

づけ (**Social Direction: SD**) と呼び、分岐には緊張関係が生じている。

必須通過点 (Obligatory Passage Point: OPP) はほとんどの人が、論理的・制度的・慣習的に経験せざるを得ないポイントのことである。また、廣瀬 (2012) は**価値変容点 (Value Transformation Moment: VTM)** という概念を新しく導入し、行動選択や転換点といった個人における変容時点を明確にした。

5. 本研究の目的

本研究では、TEMの分析方法を用いて、コロナ禍において不本意入学した学生の大学への適応プロセスを明らかにすることを目的とする。具体的には、①不本意入学から大学適応に至るプロセスをTEM図で表し、大学適応の要因を考察する。②大学適応に影響を与えた価値観の変容プロセスを発生の上層モデル (TLMG) の図で表し、考察を行う。

第Ⅱ章 方法

1. 調査対象者

X女子大学心理学部に所属する2020年度に不本意入学した学部3年生を対象に、機縁法によって募集した。その上で同意が得られた者を対象に、歴史的構造化招待 (HSI) の方法を用いて、サンプリングを行った。本研究では、①不本意入学であるかどうか、②現在の大学適応状況の2点に注目し、サンプリングを行った。本稿における不本意入学の定義は、「不本意感を持ちながら入学すること」である定め、本人の主観的な気持ちを重視した。また、大学適応感についても、同様に本人の主観的な

気持ちを重視した。

その結果、X女子大学に不本意感を持ちながら入学し、現在適応的に大学生活を送れているという学生2名 (Aさん・Bさん) から同意が得られて、調査協力をお願いした。

2. 調査時期

2022年8月～2022年12月

3. 調査方法

同意が得られた2名に、Zoomを用いて、半構造的なインタビュー調査を行った。インタビューの回数について、サトウ (2012) は、お互いの見方が融合されたトランスビュー的なTEM図を描くために、3回会うことを推奨している。そのため、インタビューは1名あたり3回行い、4回目はトランスビューのために研究者と調査協力者の間で分析データの相互確認を行った。インタビューの内容は、事前に同意を得た上で、Zoomのレコーディング機能を使用して録音・録画を行い、また、逐語記録を作成するために、オートメモを使用した。

4. 調査内容

半構造的なインタビュー調査を行うにあたり、インタビューガイドを作成した。内容は、①年齢や家族構成など基本属性について、②大学受験の状況について、③大学適応の状況について、④その他 (今後の進路や就活についてなど) とし、以上の項目に沿ってインタビューを行った。

5. 倫理的配慮

本研究のインタビュー内容は、「不本意入学」「コロナ禍での体験」に関する内容であり、過去の辛い体験を思い出すなど、調査協力者に精神的苦痛が生じる可能性が否定できないため、そうした可能性があることを研究説明文書にあらかじめ明示した。また、本研究への調査協力は自由意志であること、個人情報に厳密に管理され保護されること、答えたくない質問には無理に答えなくてよいこと、調査協力を取りやめても不利益を受けないこと、本研究で得られたデータは研究以外の目的で使用されることはないことを説明書に明記し、口頭でも説明を行った。さらに、インタビュアーとなる研究者は、調査協力者の様子に気を配り、精神的苦痛が生じる可能性を最小限にするよう配慮して進行を行った。

また、本研究に関して申告すべき資金源や個人の収益、利益相反はない。なお、本研究は本学の研究倫理審査委員会において承認を受けている。(承認番号：倫院-22-010)

6. 分析方法

インタビューデータの分析は、複線経路・等至性モデル (TEM) を用いた。インタビューデータから逐語記録を作成し、KJ法 (川喜田, 1970) を援用して切片化と文章化を行い、TEM図、発生の上層モデル (TLMG) 図を作成し、図解化した。

第Ⅲ章 分析のプロセスと結果

1. 分析のプロセス

1) 逐語記録の作成と文章化

インタビュー内容は、調査協力者の許可

を得て録音し、逐語記録を作成した。精読した内容を元に、試行的にTEM図、TLMG図を作成した。

次に、KJ法を援用して逐語記録の切片化と文章化を行った。KJ法を使用したTEM作成手続きは、廣瀬 (2012) と佐藤 (2012) を参考にした。具体的には、①逐語記録を時期区分し時系列に並べる、②意味のまとまりごとに切片化する、③切片化した文章を一文で要約して表す (ラベル付け)、④ラベルをグループ化しグループ名を付ける、⑤グループを時系列に並び替える、⑥グループ化したラベルを事象とその事象にまつわる語りに分け、事象を抽出する、⑦抽出した事象とその事象にまつわる語りから文章を作成する、以上の手順で行った。

2) 分析枠組みの設定

本研究のテーマは、「不本意入学から大学適応に至るまでのプロセス」を明らかにすることであり、そのような経験をしている対象者を歴史的構造化招待 (HSI) によってサンプリングした。そのため、径路が到達する地点である等至点 (EFP) として「大学に適応できている」と設定した。また、ここでの「適応」とは、調査協力者本人の主観的な適応感のことを表す。

両極化した等至点 (P-EFP) として、調査協力者の語りから見えてきた本人のライフストーリーに意味付けられた等至点とは逆の地点を設定した。

セカンド等至点 (2 EFP) は、調査協力者の語りから見えてきた大学生活の未来展望を設定した。

必須通過点 (OPP) として、調査協力者が共通して経験している出来事である「志

望校不合格」「入学式がなくなる・自宅待機」「オンライン授業が始まる」「隔週登校が始まる」「都内のキャンパスに移る」を設定した。

分岐点 (BFP) には「不本意入学」を設定した。分岐点は「その人を等至点へと導くうえで何らかの迷いや複雑性が生じる点」(福田, 2015) である。「不本意入学」に至るプロセスには、「行きたくないけど、浪人する勇気もない…どうしよう。でも頑張りたい。」というような強い緊張状態があり、その分岐点を始まりに、現在の大学適応に向かう径路が複数存在していると考えた。さらに分岐点において、制度的・理論的に存在すると考えられる行動・選択を設定した。不本意入学しているAさんの場合、強い緊張状態の中、「本意入学」という選択肢もあり得たため、「本意入学」がそれにあたる。また、大学適応に大きな影響を与えたと考えられるVTMが生じるきっかけとなった事象についても、分岐点として定めた。

等至点から遠ざけようと働く力である社会的方向づけ (SD) に、「コロナ」や「高校の友達は国公立の大学に合格していた」など、等至点に近づけようと働く力である社会的助勢 (SD) に「友達の支え」「大学の面談」などを設定した。

価値変容点 (VTM) として、大学適応に影響を及ぼしたとされる経験をきっかけに変容した価値観を設定した。VTMを新しく導入した廣瀬 (2012) は、VTMとは、個人において価値が変容するような経験、あるいは何かに得心がいった状態を表し、発生 of 三層モデル (TLMG) における最上層の変容する「時」を記述する概念である

と説明している。

3) 発生 of 三層モデル (TLMG)

発生 of 三層モデル (TLMG) は、文化的な記号を取り入れて変容するシステムとしての人間の動的なメカニズムを捉える理論 (安田, 2015) であり、最下層の「個人活動レベル」、中間層の「記号レベル」、最上層の「信念・価値観レベル」の三層で捉える。日常における様々な行動・感情・思考が「個人活動レベル」、そうした行動・感情・思考の変容を促進するものが「記号レベル」、そうしたプロセスを経て変容した価値観のことを「信念・価値観レベル」として位置付ける。本研究では、最上層の「信念・価値観レベル」をVTMとして設定した。

4) 事象の配置・矢印で結ぶ・トランスビュー

文章化によって抽出された事象や分析的枠組みが設定された事象を時系列に並べた。また、TEM図の縦軸は大学適応感の高低を表し、3次元に分けた。上方への位置づけは大学適応感が高い事象であり、下方への位置づけは大学適応感が低い事象、中心への位置づけは必須通過点 (OPP) や大学適応の高低に影響しない事象とした。

事象を配置した後、実線の矢印で結んだ。分岐点、両極化した等至点、セカンド両極化した等至点において、実際には選択されていなくても理論上は存在しうると考えられる径路について可視化し、点線の矢印で結んだ。

最後に、完成したTEM図、TLMG図、時期区分ごとの語りの文章を、研究者と調

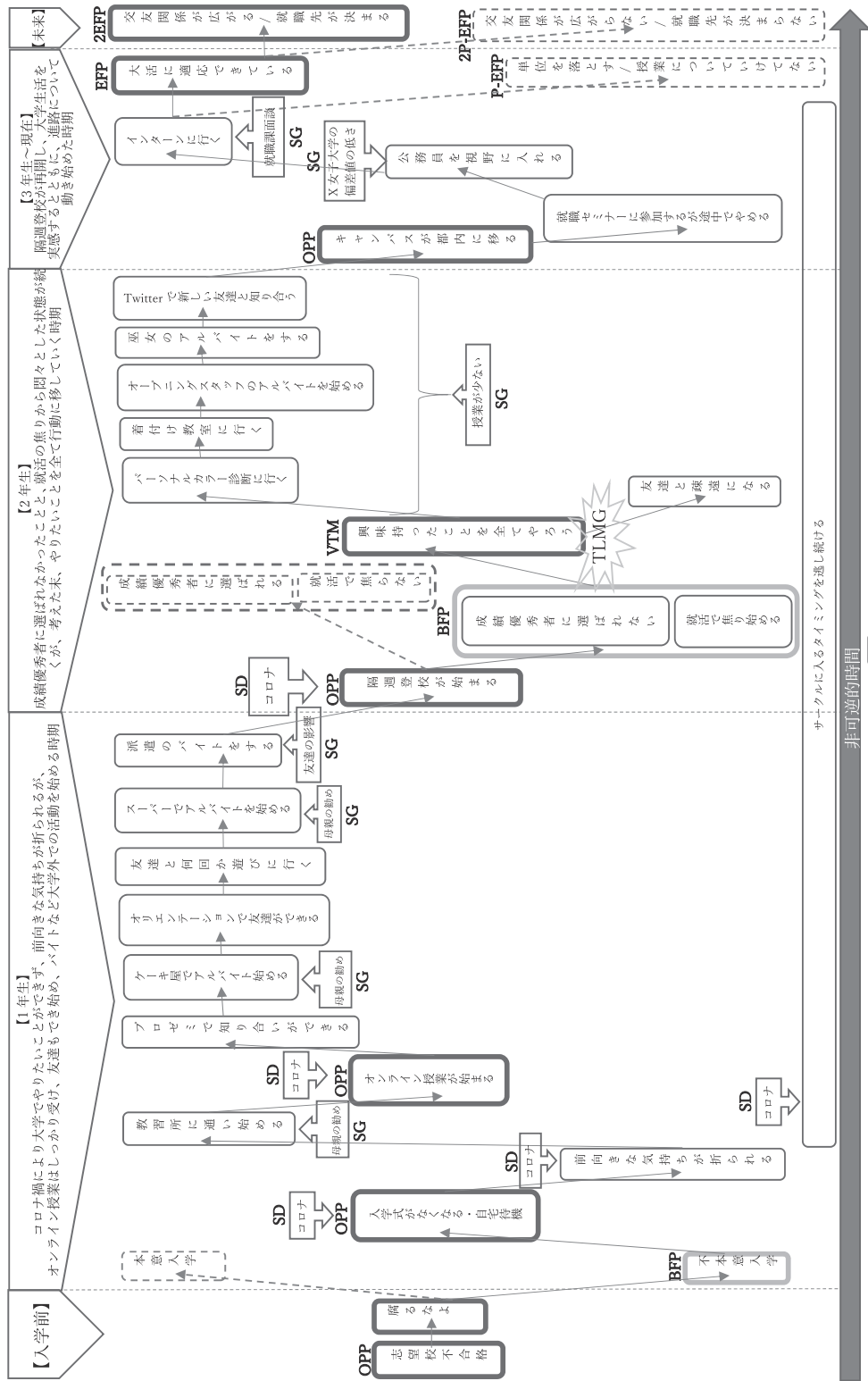


図1 Aさんが大学適応に至るまでのプロセス (TEM図)

OPP 必須通過点 BFP 分岐点 P-EFP 両極化した等至点 SD 社会的方向付け SG 社会的助勢 TLMG 理論的に存在すると考えられる行動・選択
 VTM 価値変容点 EFP 等至点 交友関係が広がる/就職先が決まる 交友関係が広がらない/就職先が決まらない
 TLMG 理論的に存在すると考えられる行動・選択

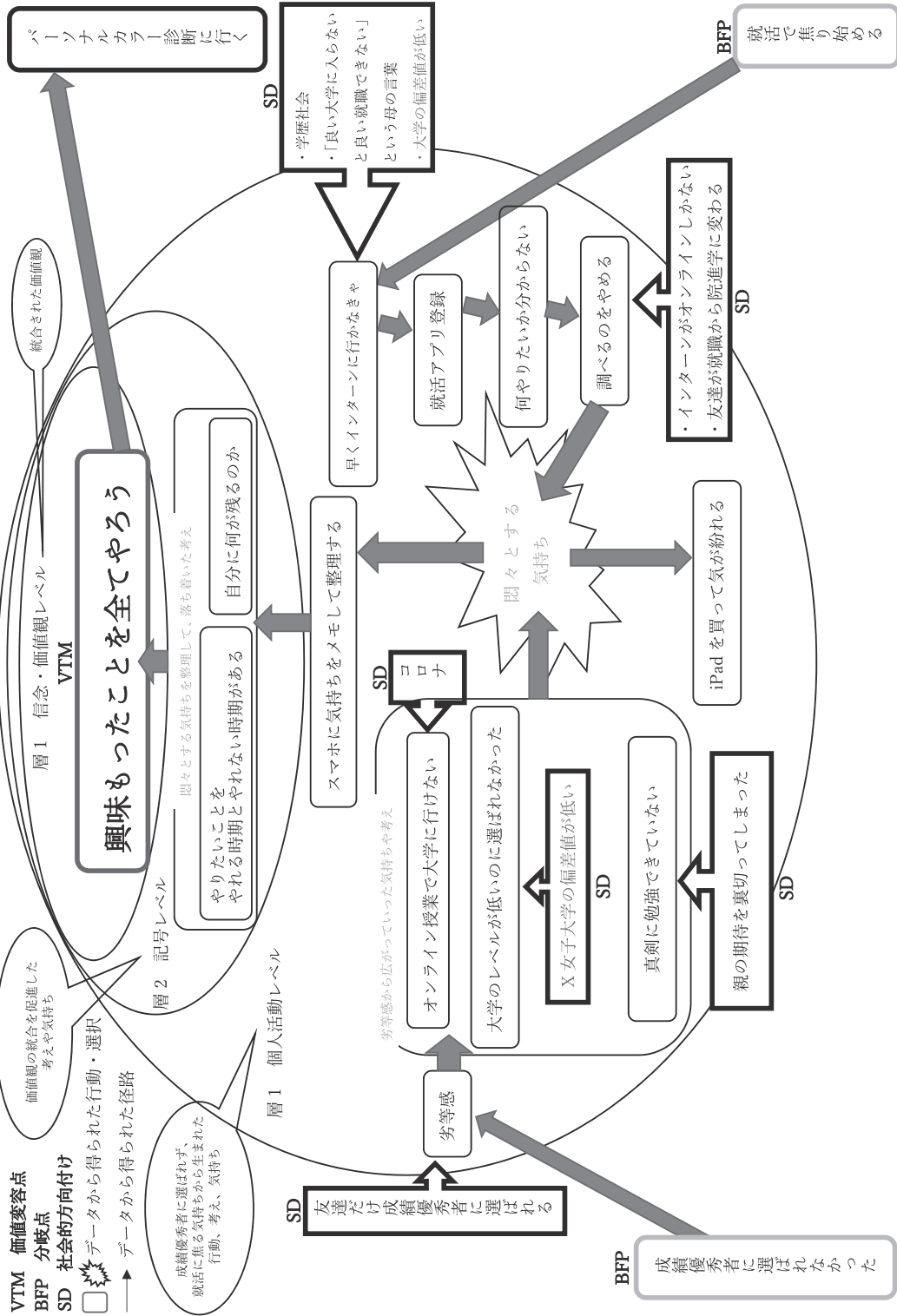


図2 Aさんが行動活性化に至る価値観の変容プロセス (TLMG図)

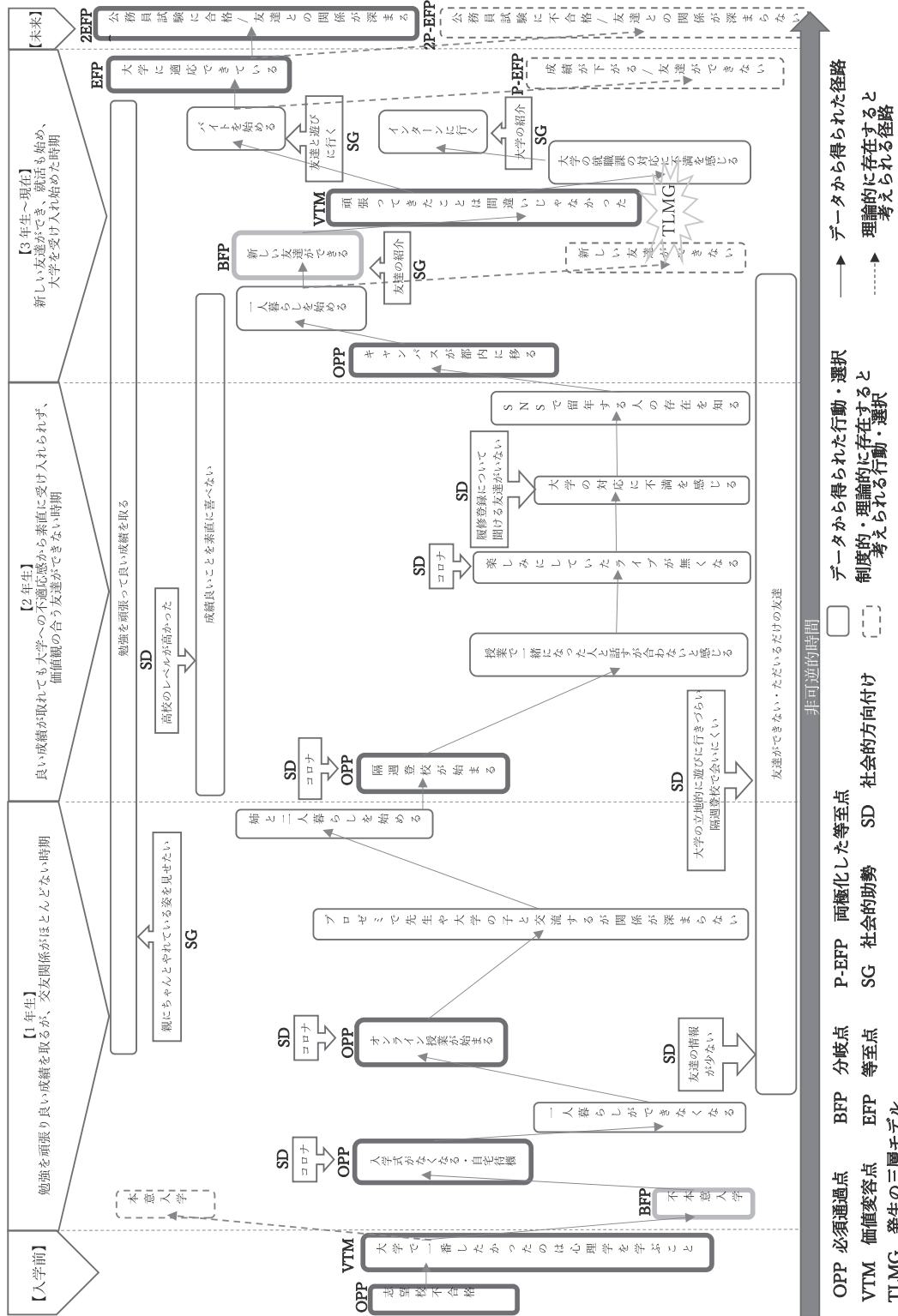


図3 Bさんの大学適応に至るまでのプロセス (TEM図)

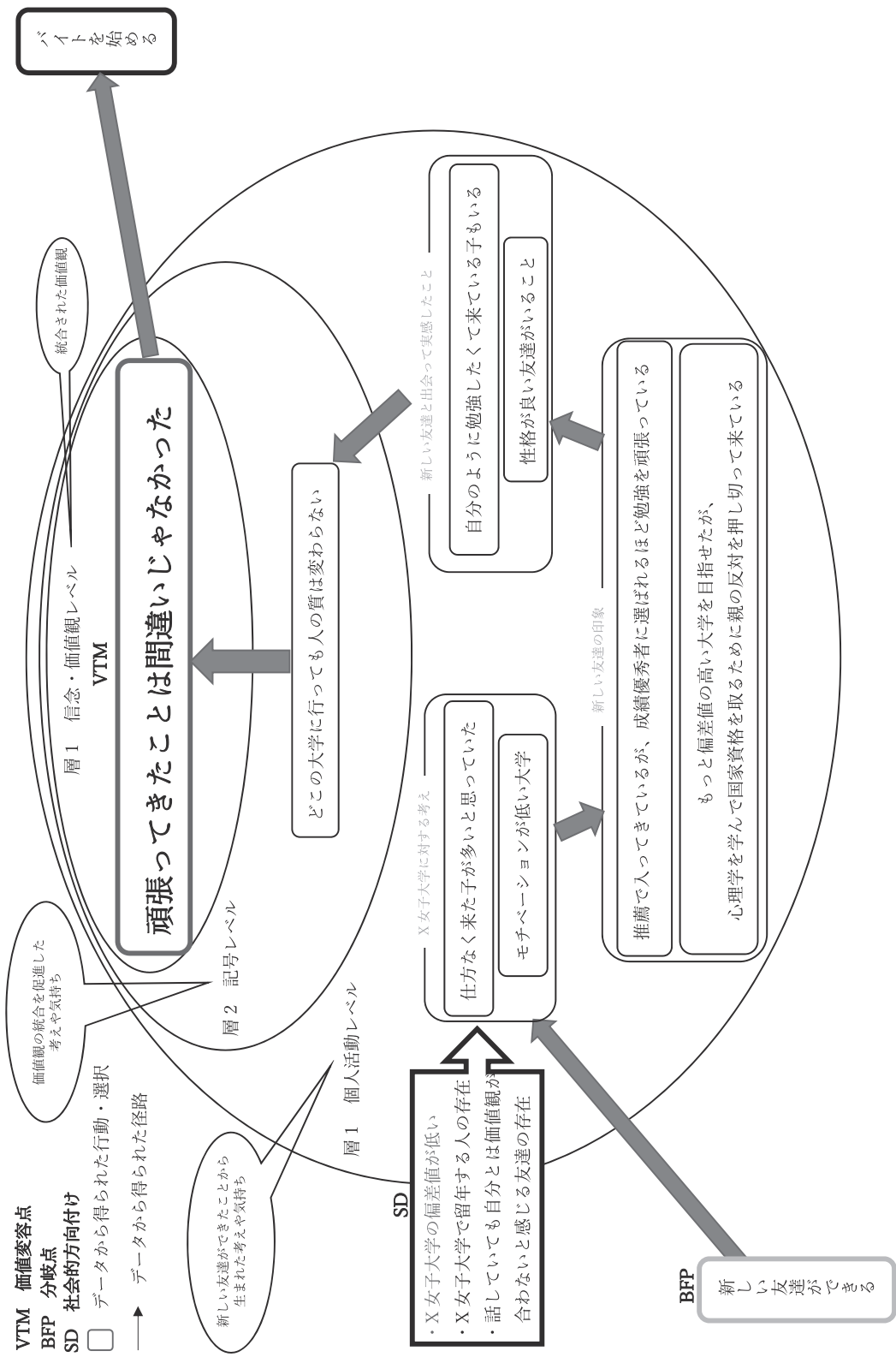


図4 Bさんの大学受容感が高まる価値観の変容プロセス (TLMG図)

査協力者の間で相互確認し、指摘を受けた箇所は修正し、トランスビューを行った。

2. 結果

AさんとBさんの不本意入学から現在の大学適応に至るまでのプロセスをTEM図で表した。(図1, 3)次に、AさんとBさんの大学適応感を高めた価値観の変容プロセスをTLMG図で表した。(図2, 4)

第IV章 考察

1. 不本意入学した学生が大学適応する要因について

1) Aさんの大学適応の要因

Aさんが大学に適応していく上での要因は「行動活性化が起こったこと」であったと考えられる。

Aさんは、「成績優秀者に選ばれなかったこと」と「就活で焦り始めたこと」をきっかけに、悶々とする気持ちが生まれ、自分を見つめ直し、気持ちが整理されていった結果、「興味もったことを全てやろう」という価値観の変容に至っている。その後、パーソナルカラー診断や着付け教室、オープニングスタッフのアルバイトを始めると、やりたかったことを次々と行動に起こしている。Aさんは、1年生の時も、教習所に行き、複数アルバイトを掛け持ちするなど、行動に活発性が見られたが、それらの行動には「母親の勧め」や「友達の影響」といった社会的助勢(SG)の力が働いており、2年時の方が、よりAさんの意思が反映されていることが窺える。

このように、Aさんは悶々とする気持ちに整理をつけ、自らやりたかったことを行動に移していったことが、自信や満足感に

繋がっていったと考えられる。このことから、ネガティブな感情は自分自身と向き合うきっかけを作り、状況を捉え直す機会となることが示唆された。また、これまで、不本意入学が大学生活の不適応を生むことは指摘されてきたが、不本意入学がAさんのように大学適応していくことに意欲的な学生の学業と就活の阻害要因になっているという具体的な状況を確認することができた。

さらに、Aさんが行動活性化という適応的な選択を取れたことを促進する要因として、1年時で行動化がステップとなり、2年時の行動を促進させる要因になっていた可能性が考えられる。その他にも、ネガティブな状況を前向きに捉えようとする力、行動力の高さなど、Aさんの個人的な要因や、Aさんを支える家族の存在が影響していることが推察された。

2) Bさんの大学適応の要因

Bさんが大学適応していく上での要因は、3年生の時に「新しい友人ができたこと」であると考えられる。

Bさんの大学生活のベースには、大学への強い拒絶感・不信感があり、それが交友関係や学業に影響を及ぼしていた。「X女子大学に来る人は勉強に対するモチベーションが低い」と捉え、良い成績が取れても「大学のレベルが低いから」と素直に喜ぶことができなくなっていた。しかし、3年生の時に、X女子大学で学びたくて入学し、勉強を頑張っている友人と出会い、「今まで頑張ってきたことは間違いじゃなかった」と思えるようになる。そこから、X女子大学にも、自分のように勉強を頑張

っている人がいるのだと分かり、大学を受け入れ始めることになった。

このように、Bさんは、新しい友人との出会いによって、大学の捉え方が変わり、Bさんの大学適応感を高めることになったと考えられる。そして、大学を受け入れることが、その大学に所属する自分自身を肯定することに繋がったと見受けられる。先行研究において、大学の捉え方によって適応感を高めることは指摘されてきたが、本研究では、その捉え方を変えるきっかけやプロセスを具体的にすることができた。

しかし、誰しもがBさんのように、ある友人との出会いによって適応感を高めることにはならない。Bさんの場合、Bさんが探し求めていたような「自分のように勉強を頑張る人」と出会えたことや、Bさん自身が大学に対する拒絶感・不信感を持ちながらも、諦めずに、交友関係にアンテナを立て続けられたことが促進要因になっていたと考えられる。

2. コロナ禍における不本意入学が学生に与えた影響

不本意入学をしているAさんとBさんの分析結果から、不本意入学からくる大学への拒絶感・不信感が、大学生活の中で【交友関係】【学業】【就職活動】の側面で現れてくることが見出された。また、その背景にあるコロナ禍がどのように作用してくるかも含め、具体的なエピソードを取り上げながら考察する。

はじめに、【交友関係】に不本意入学が影響しているエピソードについて、Aさんは、友人が成績優秀者に選ばれたことに強い劣等感を抱いており、そこには、「推薦

入学している友人は自分より下」という捉え方があった。Bさんは、大学を受け入れて生活している人と考え方が合わないと感じており、また、X女子大学で留年する人の存在を知った際には、大学に対する拒絶感を示している。しかし、Bさんは、その後、新しい友人との出会いによって、「この大学にも勉強を頑張っている人がいる」と認識し、大学を受け入れ始めた。

AさんもBさんも、大学の人に対して、「自分よりもレベルが低い」という捉え方をしていることが窺える。これは、AさんとBさんが進学校出身であることも関係している可能性が高い。しかし、Bさんの事例のように、新しい友人との出会いによって、大学の人に対する捉え方が変わり、そこから大学への捉え方が変化する場合もあることが分かった。そうした点において、コロナ禍は人との交流を制限し、友人と出会う機会や対話の場が少なくなっていたことから、コロナ禍が大学の人に対する認識を変える阻害要因となっていたことが考えられる。

次に、【学業】に不本意入学が影響しているエピソードについて、Aさんは成績優秀者に選ばれなかったことを、「大学のレベルが低かったのに選ばれなかった」と落ち込んでいる。AさんもBさんも入学当初から、授業に真面目に取り組み、成績も良い。Bさんは、不本意入学だったからこそ、「親にちゃんとやれている姿を見せたい」として、不本意入学であることが勉強のモチベーションとなっていた。

AさんもBさんも「大学の勉強のレベルが低い」と捉えており、だからこそ、「勉強を頑張ろう」というモチベーションにな

っていることが分かった。つまり、不本意入学によるポジティブな影響があることが示唆された。しかし、Aさんのように、勉強を頑張っていて成績優秀者になれなかったことや、Bさんのように良い成績が取れても素直に喜べないといったネガティブな状況が起りやすいことが見受けられる。その背景には、「大学のレベルが低い」というネガティブな捉え方が根強くあるため、やはり大学の捉え方を変えることが重要であると考えられる。

最後に、【就活】に不本意入学が影響を与えたエピソードについて、Aさんは、「大学のレベルが低い」という考えから、早くインターンに行くことを考え、就活の焦りを感じていた。その後、大学名を見られない公務員を視野に入れ始める。Bさんも公務員を志望している。Aさんは、大学への拒絶感・不信感からインターンに参加したくてもできない状況だったが、大学の紹介でインターンに参加することができた。

大学に対する拒絶感・不信感が、就活時期を早めたり、インターン参加を難しくさせることが分かった。Aさんはオンラインでのインターンしかなかったことで、調べるのを辞めており、コロナ禍が就活の阻害要因となっていたことが窺えた。また、AさんもBさんも企業就職ではなく、公務員を視野に入れていることから、不本意入学は、進路選択に影響することが示唆された。

以上、Aさん、Bさんの具体的なエピソードを踏まえて、【交友関係】【学業】【就職活動】に不本意入学による大学への拒絶感・不信感が、どのような影響を及ぼ

すことかについて確認した。そうした大学への拒絶感・不信感は、1年時に限らず、大学生活の中で何度も現われ、大学生活の不適應の根本原因であることが分かった。つまり、不本意入学は、入学時の一時的な状態ではなく、入学後も継続され大学生活のベースとなって、学生に影響を与え続けることが示唆された。このことは、TEM図の非可逆的時間の上でプロセスを理解していくことによって、過去の出来事が現在に影響することを、違和感なく理解することができたのだと考える。

しかし、Bさんのように「新しい友達との出会い」やAさんのように「大学からインターン先の紹介」によって、大学の捉え方が変わるきっかけとなったり、なかなか移せなかった行動に移すことができていた。本研究において、どのような人の支えがどのタイミングで大学適応していくために必要であるか具体的に確認することができた。

そしてコロナ禍は、人との交流を制限し、オンラインに切り替わるなどこれまでと違う生活に変わり、Aさん・Bさんの【交友関係】【就職活動】の側面での阻害要因となっていたことが分かった。しかし、AさんもBさんも【学業】においては、そうしたコロナ禍の阻害要因は見出されなかった。

また、大学への拒絶感・不信感は、ネガティブな影響だけでなく、Aさん・Bさんのように「不本意入学だからこそ勉強を頑張る」というようなポジティブな影響も見られることが分かった。しかし、大学に対する捉え方を変えないことには、不安定な状態が続くことが示唆された。

V. 本研究の限界と今後の課題

本研究はHSIというサンプリングの方法によって、「不本意入学し、現在適応的に大学生活を送っている学生」を対象に調査を行った。そのため、本研究で分かったことは、「不本意入学した学生の中でも大学適応できた学生」に関する内容であり、当然のことながら一般化できるものではなく、一般化することも目指していない。

しかし、不本意入学した学生の多くは、大学適応できずに、卒業していく場合が多いのではないかと考える。そのため、今後の研究として、不本意のまま、不適応のまま卒業した人を対象に研究を行うことによって、さらに何が大学適応への転換要因となるのか見出すことができると考える。

謝辞

本研究のインタビュー調査に快くご協力下さった方々に心より御礼申し上げます。また、本稿の執筆において丁寧な指導して下さいました下山晴彦先生には深く感謝申し上げます。

引用文献

荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ (2012), 複線径路・等至性モデルのTEM図の描き方の一例, 立命館人間科学研究, 25巻, 95-107.
ベネッセ総合教育研究 (2021), 第4回大学生の学習・生活実態調査, https://berd.benesse.jp/up_images/research/4_daigaku_chousa_all.pdf, (閲覧日: 2023年1月2日)
デジタル大辞泉(2022), 不本意入学, <https://kotobank.jp/word/不本意入学>

-669352, (閲覧日: 2022年12月26日)
廣瀬真理子 (2012), ひきこもり親の会が自助グループとして安定するまで, 安田裕子・サトウタツヤ (編著), TEMでわかる人生の径路-質的研究の新展開-, 誠信書房.
北條睦実子・戸城美佑・遠山美樹・中里英史・古川真守・城越望・下村昂平・森脇真人・石原慶一 (2020), コロナ禍下における大学生の主観的幸福度, 京都大学高等教育研究, 26, 41-50.
梶谷康介・土本利架子・佐藤武 (2021), 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) パンデミックが大学生のメンタルヘルスに及ぼす影響-文献および臨床経験からの考察-, 健康科学, 43, 1-13.
神林博史 (2014), 本学における不本意入学者の特徴: 東北学院大学新入生意識調査の分析, 東北学院大学教育研究所報告集, 14巻, 15-25.
川喜田二郎 (1970), 続・発想法-KJ法の展開と応用, 中央公論社.
日本私立学校振興・共済事業団 (2022), 私立大学・短期大学等入学志願動向, <https://www.shigaku.go.jp/files/shigandoukouR4.pdf>, (閲覧日: 2023年1月2日)
松高由佳 (2017), 大学生の不登校に関する要因の検討, 広島文教女子大学心理臨床研究, 7, 1-8.
文部科学省 (2021a), 学校基本調査, https://www.mext.go.jp/content/20211222-mxt_chousa01-000019664-1.pdf, (閲覧日: 2023年1月2日)
文部科学省 (2021b) 新型コロナウイルス

- 感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査（結果），https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf，（閲覧日：2023年1月2日）
- 大隅香苗・小塩真司・小倉正義・渡邊賢二・大崎園生・平石賢二（2013），大学新入生の大学適応に及ぼす影響要因の検討：第1志望か否か，合格可能性，仲間志向に注目して，青年心理学研究，24，125-136.
- 奥田亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子（2010），大学1回生から4回生までの横断および縦断データから見た大学生活充実度の推移，大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要，9，1-14.
- 大対香奈子（2015），大学生生活充実感を規定する要因の検討，近畿大学総合社会学部紀要，4，47-57.
- 新畑歩美・原口雅浩・江村理奈（2022），大学受験の捉え方が学校適応感に及ぼす影響－不本意入学に着目して－，久留米大学心理学研究紀要，第21号，31-41.
- 佐藤（2012），DV被害者支援員としての自己形成，安田裕子・サトウタツヤ（編著），TEMでわかる人生の径路－質的研究の新展開－，誠信書房.
- サトウタツヤ（2015），EFPとセカンドEFP，安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（編），TEA実践編－複線径路等至性アプローチを活用する－，新曜社.
- 竹内正興（2020），現代の大学入試における不本意入学者，佛教大学大学院教育学研究科博士論文（未公刊）.
- 山田ゆかり（2006），大学新入生における適応感の検討，名古屋文理大学紀要，6巻，29-36.
- 安田裕子（2015），促進的記号と文化，安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（編），TEA実践編－複線径路等至性アプローチを活用する－，新曜社.
- 全国大学生生活協同組合連合会（2022），第57回学生生活実態調査概要報告，https://www.univcoop.or.jp/press/life/pdf/pdf_report57.pdf，（閲覧日：2023年1月2日）